子ども食堂という名の居場所

21 世紀が始まって早いこと、20 年近く経ちます。2016 年度から毎年、ゼミでは、市民活動が低調といわれる日本社会において盛り上がりを見せている子ども食堂を対象に、人と人との結びつき（社会的紐帯）の機能を明らかにし、その可能性を引き出す研究に取り組んできました。つながりが希薄な現代社会では、子どもが家庭、学校、地域の中で孤立しがちです。しかし、子どもの孤立を防ぐ手立ては家族や学校だけが担うものではないと思います。子どもを受け入れてくれる地域の人がいる、お兄ちゃん、お姉ちゃんがいる、そういった信頼できる大人や若者につながったとき、一人の子どもの人生が大きく変わる可能性があります。従来の家庭、学校、地域を越えたところで、新たなつながりが芽生えつつあります。その一つが子ども食堂です。

フランスの社会学者、ロベール・カステルは、現代社会を社会との絆が断たれる時代、社会喪失の時代と捉えています。そして、『社会喪失の時代：プレカリテの社会学』の最終章で、彼が考える「個人」のあり方を「支えなくして個人なし」という言葉で表現しています。社会喪失の時代に社会的紐帯の断絶への日本の市民社会からの応答の一つが子ども食堂だと私たちは捉えています。支えるソシアビリテとしての子ども食堂の組織的基盤を、実態把握を通じて明らかにし、今後強化すべき点に関して一定の知見を引き出しておきたい。そう願ってこの研究をすすめてきました。

子ども食堂は、つながる・つなげるための第一歩を「食」においた「普通の人」による自発的な取り組みです。開催される地域、運営者、サポーターなどによって多種多様であり、食事の提供だけでなく、交流や体験、学習支援など、それぞれ創意工夫し運営されています。

子ども食堂は、日本全国で 3700 ヵ所を超え、今も増え続けています。今回研究対象となった愛知県内では少なくとも 140 ヵ所が存在するといわれていますが、その運営主体は、ボランティアや NPO、飲食店、宗教団体、福祉施設など多岐にわたります。そして、古い社会関係の自治会や子ども会などの枠を越えて、地域のボランティアや行政、企業が互いに緩やかにつながり、多様な種類のつながりを混合しながら、重層的につながりを張り巡らす仕組みをさまざまな形でつくっています。

昨年に続けて今年も、愛知県内の子ども食堂の運営者と利用者（大人と子ども）を対象に、アンケート調査を行いました。子ども食堂を利用する子どもや大人への調査は非常に難しいです。本格的な分析はこれから行われる予定ですが、まずは速報値としてご報告させていただきます。お忙しいところ、子ども食堂の関係者の皆様には大変お世話になりました。改めて御礼申し上げます。

これからも、子ども食堂が多様性と自発性を尊重しながら、それぞれの場所で定着していくために、行政、企業、社会福祉協議会、NPO、ボランティアなどと連携しながら、地域におけるみんなの居場所となるよう取り組んでいきたいと考えています。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

2020 年 2 月 25 日

成　元哲